

ロンドン総会全日程の ダイジェスト



2年ごとに開催されるIFPW（国際医薬品卸連盟）第21回総会は、9月15日～16日の日程で、英国・ロンドンで開催された。日本航空と全日空で羽田からロンドン・ヒースロー空港へ向かった。12時間30分のフライトではほぼ予定通りに到着したが、先に出発した日本航空グループは、到着ターミナルが大混雑したため入国手続きに2時間以上かかり、全日空グループは別のターミナルに到着し、入国手続きはわずか15分程度で済んでしまったとのことであった。

総会会場となったランドマークホテルは、1899年に建てられた市内中心部にある重厚なホテルであり、空港から約50分、メリルボーン駅の真向かいに位置していた。

総会前夜の14日、英国王室ご用達の会員制倶楽部「モジマンズ」において、総会参加者の顔合せの夕食会（結団式）が開催され、鈴木会長の挨拶と中北団長の乾杯で食事が始まった。

鈴木会長は挨拶の中で、「先ほど行われたIFPW理事会において副会長に就任した。したがって4年後の2020年は日本で総会が行われることが濃厚になった」と報告された。

開会にあたり、IFPW代表のマーク・パリッシュ氏は、「関係者が一堂に会しているのだから、ぜひ経験や意見交換をしてネットワークを構築して欲しい」との挨拶があった。IFPW会長のオネーラ・バーラ氏は、「テクノロジーの変化によりヘルスケア全体が影響を受けている。世界中で政治・経済が大きく変化しているが我々にとっても興味深い変化である」と述べ、これらの変化に対するIFPWの役割に期待感を示した。

初日のビジネスセッションは、IMSダグ・ロング氏とペア・トレイン氏のプレゼンテーションで始まった。2020年の世界医薬品市場は1兆4000億ドルに達すると予測、C型肝炎治療薬のピークが過ぎたことで今後は5～6%の成長にとどまると報告した。またバイオシミラーは新薬メーカーや韓国メーカーの参入により今後は価格が下落していくと予想した。

バイオシミラーの現在と将来と題するセッションでは、バイオシミラーはブランド薬でもジェネリック薬でもない中間に位置しており、バリューチェーン

のプレイヤーは更にバイオシミラーについて学ぶ必要がある。今後のバイオシミラー市場の予測は難しいが、成功のカギはサプライチェーンにおけるコラボレーションである、などの意見があった。

インターナショナル・リーダーシップ・アワードが、バーラIFPW会長からIMSヘルス社インダストリーレーションズ担当副社長ダグ・ロング氏に授与された。氏は長年、IFPW総会において数々の司会を務められた。

医薬品卸の社会的価値と会員企業のCSR活動のセッションでは、日本を代表して渡辺紳二郎氏が、熊本地震での対応について、大きな被害を受けながらも発生直後に災害対策本部を立ち上げ、情報の収集と医薬品の安定供給に努めたことを報告。また、東日本大震災以降、日本の医薬品卸は自然災害等に対応した準備を進めたことを報告、この中で、東日本大震災の経験を踏まえJPWAが作成した報告書「自然災害発生時の医薬品供給における課題と対応の国際比較」について紹介し、同報告書は会場内で配布された。一方、ディネシュ・タラチャンダニ氏は、インド、パキスタン、アフガニスタンで医薬品流通業を営んでおり、紛争地で雇用・教育を維持していること、偽薬が蔓延していることから正規医薬品を届けることが重要なミッションであることを紹介した。

16日の最初のセッションは、ウォルグリーン・ブーツ・アライアンスのステファノ・ペシーナ氏に対するデクラー・カレー記者によるヘルスケアに関するインタビューで始まった。氏は将来のビジネスチャンスは薬局にあると述べ、薬局はヘルスケアの中核にあり患者との接点を持つ場であり今後は大変重要になると強調した。

ヘルスケアサービスの将来をテーマに、IMSダグ・ロング氏の司会でIFPW理事6名によるディスカッションが行われ、日本からは中北馨介氏が登壇した。日本のジェネリック医薬品やC型肝炎治療薬の現状、今後の医薬品市場の見通しなどについて紹介。今後の日本の医薬品市場は新薬の上市があるものの、ジェネリック医薬品の使用促進による影響があり、横ばいで推移すると報告した。中国からは、政府に



総会参加者顔合せの夕食会（結団式）で挨拶する鈴木会長（左）と乾杯する中北団長

よる改革やテクノロジーの進化が小売や卸に影響を与えている。小売ではオンラインビジネスが活性化。卸業者が1万社あり上位3社のシェアは40%であると報告。欧米では、数多くのメーカー・ジェネリック・小売・卸の統合が行われ、ビジネスが大きく変化すると報告された。米国3大卸のコアビジネスは共通するも、マッケソンは国際化、カーディナル・ヘルスは医療機器事業、アメリカソース・バーゲンは薬局事業に注力していると報告された。

GEメーカーと卸が今後のジェネリックについて議論した。米国のGE市場は競争が激化し成長は鈍化、GEメーカーはスペシャリティ医薬品やバイオシミラーなど新たな領域に進出する必要がある。米国でのバイオシミラーの採用は遅れているが、今後幅広い分野でパートナーシップを結ぶことで市場は活発化すると述べた。入札が浸透している一部欧州の国では、調達先を絞ることで医薬品不足や欠品リスクが発生している実態が報告された。

メーカーの視点として世界的な3メーカーから事業の紹介があった。マイランは世界に2700の自社品を届けているがサプライチェーンについては非効率な部分が多く10%以上の医薬品が無駄になっていると説明。医薬品卸は大きなマーケティング能力を有しており患者との関係も有している所以我々と協力することで良い関係を構築できると述べた。

メルク/MSDは製品が医薬品卸に渡るまで平均6.5か所の施設を経由、リードタイムは9~12か月と説明。一方、サプライチェーンは他の産業より劣っているがコスト削減の余地はある。互いに理解と透明性を高めることが重要であると述べた。

GSKコンシューマヘルスケアは、OTC、ヘルスケアなどの消費材を中心とした事業をしておりGSKの売上の1/4を占める。最終消費者を第一に考え、直接かわる薬剤師の役割が重要と考えていると述べた。

閉会の挨拶において、マーク・パリッシュ氏から、

次回2018年のIFPW総会を米国・ワシントンで開催することが報告された。

総会期間中の14日、欧米の後発医薬品の流通に関わる実態調査のため、国際委員会メンバーがIMS社を訪問した。面談は2時間にも及んだ。続いて16日に、ウォルグリーン・ブーツ・アライアンス(WBA)最高経営責任者であるオネーラ・バーラ氏をはじめとするWBAグループ幹部と同調査のための面談が約1時間行われた。これらの後発医薬品流通実態調査は、国際委員会報告書第4弾の資料として活用される。

また15日には、日本・中国・韓国の卸団体代表者会議が開催され、次回フォーラムのテーマや日程の検討を行った。来年5月に中国・上海において3回目となるアジア・パシフィック医薬品流通フォーラムを開催する方向で検討することを決めた。

ロンドン総会終了後、スウェーデンに移動し、ストックホルム市内にある国営薬局「アポテック」を視察した。調剤部門の責任者であるアンナ氏にスウェーデンにおける薬局の変遷と役割等について説明を受け店内も案内していただいた。

スウェーデンの薬局はかつて国営だけであったが、2009年に民間の参入が可能になり、現在は国営・民間を合わせ1500店舗まで増加している。患者は、病院で診察する前に薬局を訪問する習慣があり、診療行為以外のアドバイスや血圧測定などを行い医療のハブ的役割を果たしているという。この店舗は、国内最大面積を誇り、国内唯一の24時間薬局とのこと。災害備蓄薬を常時保管しており、血清などの緊急輸送にも対応している。今後、地域医療センターに薬局を併設する予定である。薬剤師は患者から信頼・尊敬を受け社会的地位が確立している。また、医療費の個人負担は上限が決められている。調剤薬局では残薬の回収も行っており回収率はとても高い。回収された医薬品は高熱処理により廃棄されているとのことであった。